様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２５０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０３２４

研究課題名（和文）島嶼からとらえるアメリカ文学ー孤立主義のレトリック再考

研究課題名（英文）American Literature through Islands: Rethinking Rhetoric of American Isolationism

研究代表者
佐久間　みかよ（Sakuma, Mikayo）

和洋女子大学・人文社会科学系・教授

研究者番号：００３２７１８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀アメリカは、西部開拓が進展し領土拡張期を迎える。この時、太平洋上の島嶼に対するジャーナリズムの反応に注目すると、アメリカ国内の領土拡張に対する考え方が明らかになる。領土拡張を後押ししたジャーナリズムに対し、アメリカン・ルネサンス期の作家たちは、拡張主義に対して批判的な言説を展開していた。その様子をエマソン、ソロー、メルヴィルの著作から検討し、その批判の根源が独立以来の孤立主義的志向に遡れる可能性を検証した。

研究成果の概要（英文）：Nineteenth-century America marked its expansionism which is manifested in its westward movement. Moreover, the islands in the Pacific Ocean attracted attention in terms of territorial interest outside of the American continent. A plethora of news and reports on the islands in the mid-nineteenth century revealed the tendency toward expansion among American journalists. The nineteenth-century American authors, however, had doubt about American expansionism. My study inquired into the origin of anti-expansionism among American authors such as Ralph Waldo Emerson, Henry David Thoreau and Herman Melville. My research on the tension between such authors and journalism suggests that traditional American isolationism could affect American authors and led their mindset to seek true isolationism and anti-expansionism.

研究分野：アメリカ文学・文化

キーワード：アメリカン・ルネサンス　孤立主義　島嶼　メルヴィル　エマソン　ソロー　トランセンデンタリスト

１．研究開始当初の背景

グローバリズム化の中でアメリカ文学をとりまく最近の趨勢は、アメリカ文学の多文化性をメジャー/マイノリティという従来の枠から、大洋をはさんだ文化的関係、または、共時性という時間軸を設定して、大きな視座の中で捉え直す動きが活発になっていた。この分野で活躍する批評家は、トランス・アトランティックな視座でアメリカ文化の多文化性の意味を反転させたポール・ジャイルズ(*The Global Remapping of American Literature*, [Princeton: Princeton UP, 2011])、“Deep time”という観念を提唱し、アメリカ文学を間大陸的に捉え、キャノン文学とマイノリティ文学の位置関係を相対化するワイ・チー・ディモック（*Through Other Continents*, [Princeton: Princeton UP, 2006])がおり、さらには、ローレンス・ビュエルらがエコ・クリティシズム批評（*The Future of Environmental Criticism: Environmenta Crisis and Literary Imagination*, [Malden, MA: Blackwell Publishing, 2005])によって、そもそも人間だけでなく、自然環境も文学の対象として見据え、ロマン主義的な自然観をこえたグローバルな人間観・自然観から文学が見直されていた。そうした動きのなかで、19 世紀アメリカ文学を再考するために、申請者は基盤研究 C「19 世紀アメリカ文学にみる『島』の表象–孤立と共存の思想・文化研究」において、メルヴィルの作品を中心に、「島」がどのように表象されているか研究を続けた。この過程で、アメリカ的想像力に占める「島」の意義を考察するため PAMLA(太平洋古典・近代語学会)の 2011 年次大会の特別セッションに“Islands and American Culture”のテーマを企画・応募し、これが採択され、日米の研究者を招いて討論する機会を得た。このセッションで初期メルヴィル作品研究の第一人者メアリー・K・バーコウ・エドワーズ氏は、アメリカの政治とりわけ１９世紀の拡張主義がもたらした矛盾を文学作品のなかの島が表象しているとし、この時代のアメリカ人と現地人との出会いに、アメリカ文化そのものが内包する矛盾を指摘した。また、メアリー・ナイトン氏は、グアムを例にとり、ポストコロニアリズム時代の脱領土化と軍事化の狭間につくられる島民のアイデンティティの問題を追求した。下河辺美知子氏は、トマス・ペインの論文にみられる continent（アメリカ）と island（イギリス）の捉え方から両者を逆転する視座を指摘した。巽孝之氏は、フォークナー作品のニューオリンズを大西洋と太平洋をつなぐ中継点としてのメタフォリカルな島と捉えられることを指摘し、川と海の関係を反転させ大陸主義から脱却する可能性を指摘した。これらの指摘から、アメリカ文学そのものを「島」文学とみることが可能であることの確証を得た。そこで、申請者は、メルヴィル、エマソン、ソローを中心に研究をすすめ、作品中のアイルランドに注目し、アメリカとアイルランド島との比喩的類似性を引き出した。またメタフォリカルな島の意味を研究し、『白鯨』125 章で描かれるマン島の水夫に対して述べたエイハブの言葉に着眼し、島を人間に喩えるメルヴィルの人間観にアメリカと島の関係が反映されていることを指摘した（研究業績 『マン島の水夫、孤島に生まれて』)。一方で、島を地理的な意味だけでなく美学的に捉える視点を研究した。Allen Carson の *Nature and Landscape* (New York: Columbia UP, 2008) から、19 世紀アメリカにおいて自然美の意識が、ヨーロッパ大陸とは違った独自の方向へと深化していく過程を知った。これらの研究から申請者は、アメリカが地理的にみた大陸文化の諸相と心理的に捉える孤島文化の諸相の双方をか

かえる矛盾を持っており、アメリカ文学はこの矛盾を表現する文学であると捉えるに至った。地理的にみた大陸文化的諸相は、上記に述べたアメリカ文学をトランスナショナルな視座から再考する研究が盛んであり、これらの研究の知見を参照しつつ、本課題では、従来注目されなかった孤島文化の諸相を研究し、従来のアメリカの例外性を提示するだけでなく、他の孤島文化との類似性を指摘することでアメリカ文学の複合性を研究する意義があった。

２．研究の目的

研究課題「島嶼からとらえる 19 世紀アメリカ文学―孤立主義のレトリック再考」において、アメリカ文学を捉える視座を従来の大陸中心的な見方から、その成り立ちとも深く関わる「島嶼」に焦点をおいて歴史的に捉えていくことで、アメリカ文学を再考することを目的にする。アメリカ合衆国の発展において重要な役割を果たしたマンハッタン島、中南米諸島、太平洋諸島に注目してアメリカ文学を再読する。その際、とりわけ 19 世紀アメリカ文学の孤立主義的レトリックとこれらの島との関連が指摘できる。この関連を文化史的状況とあわせて考察する。

３．研究の方法

19 世紀アメリカ知識人の孤立主義的レトリックを研究するにあたり、トランセンデンタル・クラブに注目した。このメンバーであったエマソン、ソロー、フラーなどを中心に、これと対照的なニューヨークのネットワークを研究し、当時のジャーナリズムとの関係をみていった。たとえば、エマソンはエッセイ「自然論」の第１章をはじめるにあたり、「孤独に浸るためには、社会から遠ざからねばならない」と孤立をすすめる。またソローも Walden を「私がこれらのページを書いている時、私は独りでいる」と 孤立を強調する。こうした孤立のすすめを孤立主義的文化とするとこれらの背景にあるものを、エマソン、ソローがそのメンバーとなったトランセンデンタリスト・クラブとの関連でみていく。

そのために、Philip F. Gura の *American Transcendentalism: A History* (2007)を参考に、トランセンデンタリスト・クラブが作られ、それまで、独自の、いわば、主流からは孤立した立場にいた知識人たちがネットワークを作っていく様を検証し、そのつど影響を受けたと思われる思想、言論について、当時の新聞、雑誌などと平行して読んで研究を行った。この資料に関しては、平成 26 年度からハーバード大学アメリカン・スタディーズの協力が得られ、図書館の使用許可を得ているので、ホートン図書館、ワイドナー図書館などで資料を収集した。また、ハーバード大学神学部リサーチ・プロフェッサーの David Hall 教授とコンタクトをとり、十分な調査をしてから資料収集にあたる形とした。

また、当時のモンロードクトリンなどの外交政策および歴史的影響についても研究し、1823 年から 1853 年の期間に孤立主義の意味付けがかわったことと、この間に作られ、そしてクラブとしての活動をおえるトランセンデンタリスト・クラブとの関連を研究し、論文にまとめる準備を行った。

平成 27 年度以降は、19 世紀アメリカ文学における島的文化との接触という観点から研究し、以下南海諸島、マンハッタン島、ハワイ諸島などが 19 世紀アメリカ文学にどのように表象されるかに着眼し、孤立主義のレトリックとの関連をまとめる。

南海諸島―メルヴィル作品が中心となるが、非文明との接触が、文明社会の構築にどのような影響を与えたかという観点で再考した。メルヴィル作品の『タイピー』を中心に、「島嶼」の捉え方をくわしくみてい

った。前の課題の研究において現地調査を行っており、その総括を生かしつつ、考察を論文としてまとめる準備をした。

マンハッタン島―マンハッタンはその地理的重要さから、オランダ植民地、英領植民地をへて、独立戦争における中間地帯としてアメリカ合衆国の重要な都市となっていく。マンハッタン、ニューヨークを題材あるいは、舞台としたジェイムズ・フェニモア・クーパーの『スパイ』、メルヴィルの「バートルビー」を中心に、島としてのマンハッタンがどのような発展を遂げ、文化に影響を与えたかを考察する。

ハワイ諸島―アメリカの孤立主義政策の勢力圏としての西半球が、具体的に太平洋上に拡大していく契機となったのがハワイの併合であり、ハワイに向かう視線を 19 世紀小説のなかから考察することとした。

これらの調査、考察から、アメリカ合衆国における島の捉え方、また島をどのようにレトリックとして用いているか、文化的な反応としてまとめることとする。

４．研究成果

平成26年は19世紀のアメリカの知識人が孤立という概念を如何に捉え、それを作品のなかでどのように表していったか、またそれが当時の社会とどのように関わりがあったかを研究した。ハーバード大学ワイドナー図書館、ホートン図書館、ボストン公立図書館、ボストン・アセナーエウム、ローエル博物館、コンコード歴史博物館、ニューヨーク公立図書館で資料を収集した。その過程でボストンとニューヨークの知識人の考え方に差異があることがわかった。アメリカ独立以来、建国の中心地として独立心の強いボストンに対して、ニューヨークは、19世紀から文化の中心となる。ボストン中心の知識人は、孤立をポジティヴなものと捉え、個の意識を強く意識し、独自性を出す必要性を打ち出している。それが当時の外交言説とも近接していることを意識し、いわゆる外交で用いられる孤立主義「モンロードクトリン」に含まれる孤立主義が本来の孤立とは違った方向で流布していることに反対し、本来の孤立の精神を訴えていく内容のものを出版していたことが確認できた。これに対しニューヨークのジャーナリストは、過度に政治言説に反応し、結果的に政治言説を補強するような言論活動を行っていた。

平成 27 年度の研究では、アメリカ合衆国の外交政策が孤立主義的傾向から帝国的拡大へと転換する際に、政治言説に対して地域による反応の違いを研究したことを踏まえ、その際レトリックとして強調される「個性」あるいは「キャラクター」が文学者の間で重要性をもって流布することが確認できた。これらの語の意味が果たしてどのようなニュアンスで理解されていたかについての研究に発展させた。11 月には、PAMLA 学会で、“Literary Property and Character in the Nineteenth Century American Culture”をテーマに宇沢美子氏(慶應義塾大学) 深瀬有希子氏 (実践女子大学)、 ボニー・カー・オニール氏(ミシシッピ大学)、マーティン・ケヴォルキアン 氏 (テキサス大学) をパネリストとしてセッションを組み、作家と版権、国際状況を踏まえた意見交換が行えた。

「個性」「キャラクター」の重視はアメリカ文化のなかではともすると反知性主義と結びつきアメリカ文化の一側面を表すとされるが、これらの語の持つ意味について再考するため、エマソンのエッセイを中心に再考した。当時の外交政策である孤立主義のレトリックが領土拡大へ変換されていく時代にあって、文学者が懐疑的な意味合いで捉えていることを検証した。

孤立とアメリカ文化の確立との相互関係、そしてアメリカ的個性の持つ意味と当時の帝国的拡大についてのレトリカルな近似性を研究した。この結果を第10回国際メルヴィル会議、 PAMLA学会、成蹊大学研究会、および駒場英語圏研究会で口頭発表を行った。また資料調査のため8月にボストン・ニューヨークに出張し、ハーバード大のホール教授から研究の助言を受け、東京で研究会を開くことができるよう打ち合わせを行った。この研究結果を和洋女子大学紀要に論文としてまとめ発表した。

さらに、アメリカの帝国的拡大と孤立主義のレトリックの関係を地政学的に検討するため、ハワイに行き調査を行った。ハワイの発展におけるニューイングランドの牧師層が果たした役割とハワイ諸島おける帝国内帝国の進展の関連を研究し、島嶼の持つ意味の再考につなげていく準備をした。そもそもハワイに焦点が当たるのは、1840年代にすでにアメリカの西漸運動が太平洋上に及ぼうとすることを意味する。『タイピー』の原稿段階の「補遺」の記述は、メルヴィルがアメリカの拡張主義に反対している証左となる。同時期の作家たちも拡張主義には反対の立場をとり、当時のジャーナリズムの喧伝する拡張主義の標語「マニフェスト・デスティニー」には疑問を呈する。これらの拡張主義に反対する姿勢のレトリックの系譜をたどると、独立革命期の孤立主義に求めることができるという推測ができた。

平成28年度は、19世紀アメリカ文学の状況を作家の立場と出版から研究し、孤立主義的レトリックとの関連を探った。エマソンがアメリカ人に求めた独立心は、孤独の勧めでもある一方、不安を引き起こすものであったことを、メルヴィルの短編小説「バートルビー」の孤絶する主人公像に注目して研究した。

この研究結果を、2016年9月に九州アメリカ文学会支部会の招待発表で「アメリカン・ルネサンス期作家のキャラクターとコピーライト ──国民性と個性という病い」として発表した。10月には、日本ソロー学会でシンポジウムを企画し、「Dissentとポリティクス」というテーマで、新田啓子氏（立教大学）、武田将明氏（東京大学）、山本洋平氏（明治大学）、元山千歳氏（京都外国語大学）に発表を依頼し、権利に関する文学者の反応について意見交換を行うことができた。同じく10月にデイヴィッド・ホール氏（ハーバード大学）を招き、初期アメリカ学会と共同し研究会を行い、大西洋を挟んだキリスト教の国際活動について意見交換を行った。これらの成果を、ソローにおける孤立主義の系譜についての考察としてまとめ、ソロー学会学会誌『ヘンリー・ソロー研究論集』に、「ソローの市民的不服従と孤立主義」としてまとめた。ソローは、国家を拡大でなく、求心的なイメージでとらえる。アメリカ国民文学成立期における孤立主義的傾向とアメリカの拡張主義との対抗関係を「島」を舞台にした作家たちの記述に探っていった。

平成 29 年度には、島での経験が豊富なメルヴィルの状況を研究し、メルヴィル国際学会で発表した。この際、メルヴィルのハワイ体験に焦点を当て『タイピー』の削除部分について考察した。メルヴィルはハワイでイギリス領事関係の仕事をし、ハワイにおけるアメリカの活動をイギリス側から見る経験をした。帰国し、ハワイに関する記事を読み、ハワイで起こった事件に関して、アメリカ側からの見方に改竄していると感じた。『タイピー』に「補遺」を付し、この一件の経緯を記した。しかし、アメリ

カでの出版に際し、書き直しを求められこの部分を削除した。こうした編集の問題は、作家の authorship の問題であると同時に、アメリカの報道の在り方をあきらかにするものである。『タイピー』の一部削除にいたる経過は、イギリス版とアメリカ版の違いという、トランスアトランティックな対抗関係の焦点が、太平洋上の島ハワイに及んでいることを示していた。

帝国的になるアメリカ合衆国内では、そうした動きに懸念を持つ文学者たちが、孤立主義的自我の形成を促し、建国以来の理想に戻ろうとする言論活動を行っていた局面が明らかになった。そして、その一方でアメリカが帝国的になるにつれ、島の意味が重要性を持ち、政治言説と文学作品の間で緊張関係が生まれていることも確認できた。こうした緊張関係についてはさらなる研究が必要である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４　件）

① 佐久間 みかよ、「ソローの「市民の反抗」と孤立主義」、『ヘンリー・ソロー研究論集』、査読有、2017 年、20-32.

② 佐久間 みかよ、「ハーンの英文学試論」、和洋英文学会誌、査読無、51, 2017 年、103-113.

③ 佐久間 みかよ、「Ralph Waldo, Emerson のレクチャー”The Young American”をめぐる出版事情」、和洋女子大学紀要、査読有、56 号、2016 年、17-27, DOI info:doi/10.18909/0001377.

④ Mikayo Sakuma, “Rethinking Cultural Awareness toward Nature: Oriental Animals in Herman Melville’s *Clarel,*” Pacific Coast Philology,査読有、2015 年、64-81.

〔学会発表〕（計　７　件）

① Mikayo Sakuma,“Melville and Dickens: Copy Right and Adaptation,” The 11th International Melville Conference, 2017 年 6 月 30 日、Kings College, London, UK.

② 佐久間 みかよ、「アメリカン・ルネサンス期作家のキャラクターとコピーライト —国民性と個性という病い」、アメリカ文学会九州支部、2016 年 09 月 03 日、福岡大学.

③ 佐久間　みかよ, エマソン言説の“character”が指示する超越する身体性･大陸性」、2015年度第3回マニフェスト･デスティニーの情動的効果と 21 世紀的惑星的想像力研究会: エマソンと情動の政治学、2015 年 10 月 26 日、成蹊大学.

④ Mikayo Sakuma, “*Billy Budd* in a Global Context,” 10th International Melville Conference, 2015 年 6 月 27 日、慶應義塾大学.

⑤ 佐久間 みかよ 「トランセンデンタリストとアメリカン・スタディーズ」、日本メリカ文学会東京支部、2015 年 3 月 28 日、慶應義塾大学.

⑥ Mikayo Sakuma, “Poe and Isolationist Politics,” 4th International Poe Conference, 2015 年 3 月 1 日,NY, USA.

⑦ Mikayo Sakuma, “The Transcendental Club and American Isolationist Politics,” Convention Center、Riverside, CA,USA, 2014 年 10 月 30 日.

〔図書〕（計　２　件）

① Mikayo Sakuma, “Emerson’s Circles and Publishing,” *Thoreau in the 21st Century Perspective from Japan,* 2017 年、274(98-113).

② Mikayo Sakuma, "Colacurcio, Teacher and Lecturer,” *A Passion for Getting It Right,* Ed. Carol Bensick 2016 年, 510 (391-394).

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０　件）

○取得状況（計　０　件）

〔その他〕

ホームページ等

https://www.islands-culture.com

６．研究組織

(1)研究代表者

佐久間　みかよ（Sakuma, Mikayo）

研究者番号：00327181

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力

デイヴィット・D・ホール（David D. Hall）

マーティン・ケヴォルキアン（Martin Kevorkian）

ボニー・カー・オニール　（Bonnie Kerr O’neille）